

大学および学科便り

## 2025年度 藍野大学医療保健学部の歩み

医療保健学部長 後藤昌弘

2025年は、日本社会にとって大きな節目の年であった。大阪・関西万博の開催は、世界から大阪、日本へと再び注目が集まる契機となり、未来社会の在り方や健康・医療の価値を改めて問い直す機会となった。また、我が国では初の女性総理大臣が誕生し、多様性と包摂性を基盤とした新たな社会像が示された一年でもあった。変革と挑戦が同時に進行するこの時代背景の中で、医療人材を育成する大学の社会的責任は一層重みを増している。

一方で、大学を取り巻く環境は依然として厳しさを増している。18歳人口は長期的な減少局面にあり、2025年には約106万人とされ、今後も減少が続く見通しである。大学進学率は60%前後で推移しているものの、大学数の多さと地域間格差の影響により、大学入試は「全入時代」から「選ばれる大学」への転換を迫られている。こうした状況下で、各大学は教育の質保証、特色の明確化、社会的要請への迅速な対応を通じ、生き残りをかけた入試・広報戦略を展開している。

このような環境の中、2025年度の藍野大学医療保健学部における入学状況は、各学科の特色が一定程度評価された結果であった。理学療法学科は入学定員80名に対し105名、作業療法学科は定員40名に対し39名、臨床工学科は定員30名に対し18名の入学者を迎えた。また、2025年に新設した健康科学科は定員30名に対し11名の入学者数であった。理学療法学科および作業療法学科では安定した志願動向が見られるものの、臨床工学科および健康科学科においては課題を残したため、学部定員180名に対して入学者173名、定員充足率96.1%という結果であった。

とりわけ臨床工学科および健康科学科については、学科の魅力や将来性が十分に受験生・高校現場へ伝わっていない点が課題として浮き彫りとなった。今後は、臨床工学技士が担う高度医療機器管理、集中治療や在宅医療分野での役割拡大といった社会的需要を明確に打ち出すとともに、病院・企業との連携による実践的教育や資格取得支援の充実を通じ、職業イメージとキャリアパスの可視化を図る必要がある。

また、健康科学科においては、予防医療、健康増進、データヘルス、地域包括ケアといった幅広い進路可能性を強みとして、高校生や保護者に対し「医療×健康×社会」を横断的に学べる学科であることを積極的に発信していく必要がある。具体的には、他学科との横断型教育プログラムの構築、地域・自治体と連携したフィールドワークの充実、卒業後の進学・就職実績の丁寧な提示などを通じ、学科の独自性と将来展望を明確にしていく方針である。「少人数だからこそ実現できる丁寧な教育」という学科の強みを前面に打ち出し、志願者増加につなげていきたい。

2025年度(令和7年度)看護学部の取り組み

看護学部長 本多容子

1. 看護学部スタート

2025年度(令和7年度)4月より、看護学部看護学科としてあらたなスタートを切ることとなり、第1期生・128名の新生を迎えた。看護学部の1年間を表1に紹介する。

表1. 看護学部看護学科の1年間の出来事

月	行事等	備考
4月	入学式 新入生歓迎会 ※歓迎会	
5月		
6月		4年生 統合看護学実習
7月	臨地実習指導者交流会 ※納涼会	4年生 公衆衛生看護学実習 I II
8月	AinS-Lab. 完成内覧会・看護学部開設 記念イベントの開催 ※本誌報告参照	3年生 領域実習(7領域)
9月		1年生 基礎看護学実習 I (見学) 4年生 教育実習 4年生 養護実習
10月		藍野祭
11月		
12月	病院説明会(就職支援) ※忘年会	2年生 基礎看護学実習 II
1月		
2月		保健師国家試験 看護師国家試験 1年生 基礎看護学実習 I
3月	祝卒業フォローアップ研修 卒業式 ※送別会	

2. 研究活動

本年度も多くの教員が科学研究費助成をうけ研究に取り組んでいる。その他、学内外の研究助成金の獲得など研究活動に意欲的に取り組んでいる。若手教員の活動の一部を紹介する。

◇前川麻記

2025年度日本公衆衛生看護学会 学術奨励賞(優秀論文部門)

受賞論文「乳幼児を子育て中の共働き夫婦のワーク・ファミリー・コンフリクトに関連する要因—ソーシャル・キャピタルに着目して—」日本公衆衛生看護学会誌 13巻1号 p.2-12

◇三宅光代

日本健康行動科学会第24回学術大会 優秀発表賞

受賞発表「DLBカフェの取り組みから生まれた学生ボランティア活動」

◇卒業生の学会発表

第30回日本糖尿病教育・看護学会学術集会 講演発表

発表テーマ「20歳未満発症の1型糖尿病患者の成人期医療への移行の実態とセルフケア能力」

発表者:梅田英子、矢代かん奈(大阪府済生会野江病院)、柴口響大、神田栄美子



卒業生の学会発表



三宅光代  
日本健康行動科学 24 回学術大会  
優秀発表賞 受賞



前川麻記  
2025 年度日本公衆衛生看護学会  
学術奨励賞 受賞

3. 実習協力病院への臨床研究支援

①医療法人恒昭会 藍野病院

- ・研究方法の講義
- ・グループ別の研究指導(研究計画立案～まとめ、学会発表まで)
- ・学会発表

第56回日本看護学会学術集会 口演発表

発表演題:車椅子で過ごす高齢者の下肢浮腫に日中の臥床は有効か?

第33回日本慢性期医療学会 ポスター発表

発表演題:チーム医療推進の一環として介護福祉士による介護教育体制が組織化されるまで

②社会福祉法人恩賜財団 京都済生会病院

- ・グループ研究指導(研究計画立案～まとめ、学会発表まで)
- ・学会発表

③社会福祉法人 京都社会事業財団 京都桂病院

- ・研究方法の講義
- ・グループ研究指導(研究計画立案～まとめ、学会発表まで)
- ・学会発表

第56回日本看護学会学術集会 口演発表

発表演題:病棟看護師の各勤務状況と病棟間における歩数の比較検討

④社会医療法人東和会 第一東和会病院

- ・個別研究指導(研究計画立案指導)
- ・研究方法の講義

4. 社会貢献活動

今年度も多くの社会貢献活動を実施した。学生も参加した活動の一部を紹介する。

- ◇「親子 de Aino かふえ」  
内容:「出会いの」と「藍野で」を掛け合わせたネーミングの親子カフェ  
日程:毎月第3木曜日 11:00～13:00
- ◇「レビー小体型認知症カフェ」  
内容:レビー小体型認知症のご本人とご家族対象の認知症カフェ  
日程:毎月第3土曜日 13:00～15:00
- ◇ダウン症親の会「でんでんむしの会」  
内容:託児ボランティア  
日程:6月、9月開催
- ◇レビー小体型認知症勉強会/ご本人とご家族の交流会  
内容:レビー小体型認知症の講演会と当事者・家族会  
日程:6月、10月
- ◇藍野病院「まちの保健室」  
内容:転倒予防のための足指力測定と転倒予防指導コーナー出展  
日程:5月
- ◇高槻市立三箇牧公民館「こどもまつり わくわくこどもひろば」  
内容:子ども向け看護体験「おしえて！ ナースせんせい」  
日程:11月
- ◇高槻市立今城塚公民館「こどもまつり」  
内容:子ども向け看護体験「おしえて！ ナースせんせい」  
日程:2月
- ◇「ハミング・オアシス」  
内容:在宅で過ごす病気や障害のある子どもたちへの器具や便利グッズの展示会運営ボランティア  
日程:8月
- ◇「スペシャルキッズサポーターの集い」  
内容:ボランティアスタッフ  
日程:3月
- ◇藍野大学・太田地区福祉委員会・さんすい学園運動・健康の実践講座 第2回  
内容:いま聞きたい！ 乳幼児からの性教育を助産師の立場からこどものなぜ？なに？に、どうする？
- ◇ユース保健室  
内容:若年層対象の相談支援活動



## 2025年度(令和7年度)看護学科の取り組み

看護学科長 西田 千夏

### 1. 学修への支援について

2025年度(令和7年度)は看護学部看護学科としてあらたなスタートを切ることとなり、看護学部看護学科第1期生・128名の新入生を迎えた。新入生が安心して大学生活を送れるよう、入学後早期(4~5月)に個別担任面談を実施した。学習支援も早期から開始し、基礎学力の定着に向けたミニ講義や基礎部分の解説等を行った。実習では基礎看護学実習Ⅰを9月・2月に終えて、看護職の責任とやりがいを臨地で学ぶことができた。

2年生にも、時間割の空き時間に学習支援を行った。知識だけではなく技術の振り返りも実施し、根拠と技術をつなげることを学ぶことができた。12月の基礎看護学実習Ⅱでは、看護計画を立案し、対象者の健康回復に向けた看護実践の基礎を修得した。

3年生は、領域実習を8月下旬~2月下旬で実施した。地域・成人看護学実習Ⅰ(3週間)、地域・成人看護学実習Ⅱ(3週間)、地域・老年看護学実習(1週間)、老年看護学実習(3週間)、母性看護学実習(2週間)、小児看護学実習(2週間)、精神看護学実習(2週間)、在宅看護学実習(2週間)を履修し、看護職に求められる基礎知識、看護技術、態度を身につけていった。

4年生は、6月に統合看護学実習(2週間)、保健師課程選択学生が公衆衛生看護学実習Ⅰ、Ⅱ、教職課程選択学生が教育実習を履修し、看護管理や各専門職における基礎的能力を修得した。国家試験対策では模擬試験の成績が年間を通じて昨年を下回っていたが、個別指導に力を入れた結果、最後の模擬試験では昨年の成績を上回った。2025年3月には卒業フォローアップ研修を実施し、2026年3月も実施予定である。他大学学生にも参加周知を行い、同じ看護職を目指す仲間と共に学生生活最後に学び合うことで、関係構築や基礎技術の修得を目指す。

今年度完成したAinS-Lab. (Aino Simulation Lab ; 環境型シミュレーションラボ) は、様々な授業で活用した。一例として、地域で生活する難病療養者を招き、学生との実際の関わりを通じた対象者理解の授業を展開した。実践する学生は限られているが、ラボの映像システムを利用することで、全学生が対象者と学生の体験を身近に感じられる授業展開ができた(写真1)

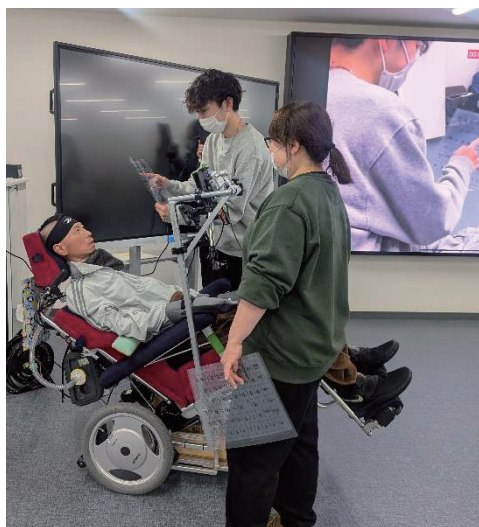


写真1 地域・在宅看護学援助論 AinS-Lab.での授業

## 2. 学生生活への支援について

新入生歓迎オリエンテーションでは、学科紹介、学習方法、上級生からのアドバイス等の後「玉入れ大会」を開催し学生間の親睦をはかった。

オープンキャンパスには学生が多数参加し、大学や看護の魅力を伝えた。オープンキャンパスに参加した高校生や保護者から、学生や教員の活気や温かさが感じられたという声が多数あった。

10月のあいの祭では、昨年に引き続き看護学科教員による模擬店の出店や仮装コンテストへの参加など、教員・学生が協働して盛り上げた。(写真2)



写真2 あいの祭

## 3. 実習施設との連携について

7月に実習委員会による実習意見交換会、12月に就職指導委員会による就職説明会を本学で実施した。

実習意見交換会では大学から全体での実習総括を説明した後、領域ごとのグループに分かれて、実習目標達成に向けた課題と協同方法を話し合った。実習施設間での話し合いが活発に行われ、臨地では新人教育等の現状も踏まえて基礎看護教育に必要な知識や技術について意見交換した。実習意見交換会の終了後に、看護学部開設とAinS-Lab.完成を記念した交流会を行い、親睦の機会となった。(写真3)

12月の就職説明会には30の実習施設がブースを設置し、説明を実施した。1回の説明時間が短いという意見からは、施設側の本会への期待が窺えた。学生の第一希望を優先したスケジュールに沿って多くの学生が集中して聞く方法での実施は、例年通り好評であった。学生も真剣に説明を聞いており、就職に直結し有意義であったという意見が多数挙がっていた。(写真4)

終了後の参加施設へのアンケートでは、両会とも、開催時期や場所、方法についての満足度が高かった。

## 4. 2026年度に向けて

看護学部看護学科として、学生の知的好奇心を高め、地域のニーズに応えられる能力を育成するための教育実践に取り組む。卒後を見据えた質の高い教育を実践するために、教育カリキュラム・評価基準の見直し、実習施設との連携、学生個々への支援、教員の教育力の向上を目指したい。



写真3 実習意見交換会



写真4 就職説明会

## 2025年度の理学療法学科の取り組み

理学療法学科 学科長 寺田 茂

2025年度の理学療法学科の取り組みについて「学生教育」「社会貢献活動」「学術活動」の3点から1年間を振り返り報告します。

「学生教育」では、学年担任・副担任を中心とした学生に対する年2回の個別面談を通して、学業、学生生活全般に対する課題や問題点をいち早く把握するきめ細やかな対応を実践してきました。また、単位認定試験における成績が低迷している学生を対象にして、少人数制による支援を実施し基礎知識の底上げと勉学に臨む姿勢の定着に努めてきました。特に4年生については、国家試験対策としてグループ学習を中心に、学生がグループ内で自らの役割分担や学習目標を定め、自律的に学習するような働きかけを行いました。それと同時に学習の進捗状況が遅れている学生に対しては、対象を選別し、教員による個別指導も実施し、また、対策全般を通して、模試などのデータ管理を行い、適宜学生に対してフィードバックを与えることにより、効果的な学習となるような働きかけも実施してきました。これらの取り組みが実を結び、第61回 理学療法士国家試験に全員が合格することを期待しています。

「社会貢献活動」については、藍野大学の認知度向上と帯同する学生の実践教育を目的に、茨木市との連携事業を推進しました。また、貢献活動の一環として様々な領域における講演が29件、役員・委員の就任が22件と幅の広い活動を展開することができました。

「学術活動」については、大学の認知度向上、若手教員および学生に対する研究指導の強化を目的に、個々の教員が各専門分野で積極的な研究活動を行いました。その結果、科研費の採択件数は新規3件、継続7件の計10件となり、また学科教員が著者の掲載論文数は8本(英語論文7本、日本語論文1本)となりました。学会発表は、24演題(国際学会2題、国内学会22題)と活発な活動であったと思います。

その他の取り組みとして、卒業生や臨床実習関連施設のスタッフを対象とした「藍野理学療法学科卒後研修会」を表に示す日程で2名の講師を招き、脳血管障害分野と運動器分野の研修会を各2回、合計4回/年実施いたしました。また、理学療法学科の臨床教授に登録されている理学療法士に講師を依頼し、基本的な知識から現場での治療技術などをご講義いただきました。

次年度以降も「学生教育」「社会貢献活動」「学術活動」の三つの領域において、所属教員が一丸となって取り組み理学療法学科のさらなる発展・向上に努めていきたいと考えています。

表1 2025年理学療法学科卒業研修会のスケジュールと参加者

分野	回	日付	時間	参加人数
脳血管	第1回	11月5日(水)	19時00分～20時30分	13
	第2回	12月10日(水)	19時00分～20時30分	33
運動器	第1回	11月13日(木)	19時00分～20時30分	33
	第2回	12月4日(木)	19時00分～20時30分	20

■ 脳血管

講師 君浦隆ノ介先生 藍の都脳神経外科病院

テーマ 脳卒中運動麻痺回復と歩行再建のリハビリテーションー痙縮治療・デバイス併用療法・歩行再建ー

第1回タイトル：MRI画像の見方と脳の構造と働き

第2回タイトル：デバイス併用療法（痙縮治療・rTMS・装具療法）

■ 運動器

講師 森英人先生 河内総合病院

第1回 人工骨頭置換術後の歩行・ADL獲得における治療戦略とリハビリテーション

第2回 大腿骨転子部骨折術後の歩行時痛に対する治療戦略とリハビリテーション

## 2025年度の作業療法学科の取り組み

作業療法学科 学科長 尾藤 祥子

2025年度の作業療法学科新入学学生数は39名となり、定員まで1名が届かずであったが前年度の24名から増加した。在籍学生は151名となる。

### 1. 学生募集、広報活動について

昨年度同様に、ほぼ専願で定員を満たす必要があり、作業療法士の魅力とともに藍野大学の作業療法学科の魅力を効果的に広報する必要性は高い。

作業療法学科では保育士の国家試験受験を支援する取り組みを開始し、該当学年の2年生が次年度1回目の筆記試験を受験する。筆記試験対策として「保育学入門」を選択授業として設定し、作業療法学科発達領域の担当教員で試験対策に取り組んでいる。(写真1)併行して保育所、子育て広場の見学体験も設定しており保育士とのダブルライセンス取得に対するサポートを充実させている。(写真2・写真3)



写真1 保育学入門の授業風景



写真2・写真3 子育て広場と保育所での見学体験

独自に作成したリーフレットを持参して大規模な高校訪問を行うと共に、高校ガイダンスについても保育とのダブル

ライセンスの周知を行った。また、作業療法の説明においては「心理」「保育」「支援」「子ども」「学校」といったように高校生の世界観に合わせた言葉に置き換えた。そのことで身近で明るい、未来や希望が想像でき、「人と関わる時間が楽しそう」というイメージを与えた。また AI に取って代わられない職業としてのアピールも行った。

オープンキャンパスにおいては引き続き 4 ブース形式とし、保育・心理・認知スポーツ・運動・子ども・作業などからテーマを選択して実施した。その中では在学生や教員との交流機会を増やし、体験を通して藍野大学作業療法学科の魅力を伝えた。

オープンキャンパスの高校 3 年生の参加者は昨年度よりも延べ 47 名増加している。また、入試では他の中堅大学が更に苦戦するなかで、定員を超えるまでの入学予定者数となった。

今後は、そうして入学した学生が、確実にダブルライセンスを取得し、発達支援の領域で活躍できるようなクオリティの高い学びを提供し、この領域は藍野大学作業療法学科の右に出るものがない、という評判を作り上げていきたい。

## 2. 社会貢献活動

### (1) 茨木市 CSW 協議会主催の福祉活動交流会

3 年生の学生 40 名で参加した。茨木市の福祉委員や公民館、自治会、相談支援事業所やユースプラザ、地域包括支援センター等の関係機関スタッフ、地区保健福祉センター、市役所関係課の市の職員、茨木市 CSW と、色々な立場の方々が集まる中に学生も参加し、地域でどのようなことが受け継がれてきて、今後どのようにすれば誰もが住みよい街にできるのか考えた。また地域の方との対面での交流を通して「人とのつながり」の大切さ・楽しさを実感でき、非常に良い学びとなった。(写真 4・写真 5)



写真 4・写真 5 福祉活動交流会の様子

### (2) 茨木市食育推進月間イベント

11 月 14 日～15 日に茨木市食育推進月間イベント「食で創るこころとからだ」に作業療法学科で出展した。社会貢献活動としても、作業療法士の職域を知ってもらう啓蒙活動としても、また藍野大学という同じ地域にある大学をよく知ってもらう広報としても有効であった。(写真 6)



写真6 食育推進月間イベントの様子

### 3. 研究活動について

4名の教員が科学研究費助成を受け、研究に取り組んでいる。その他学科教員研究活動も論文、学会発表と意欲的に行っている。また助手の教員2名が藍野大学の健康科学研究科の修士課程で今年度修了予定である。

また4年生学生3名が教員の指導の下、大阪府作業療法学会で演題発表を行い見事「学生賞」に選ばれた。



写真7・写真8 大阪府作業療法学会での発表

### 4. 国家試験対策

国家試験対策プログラムを改訂して3年目となるが国家試験合格率100%となった。今年度は結果が待たれるところであるが、現在のプログラムに加えてその年度ごとの集団の特性、個々の学生の特性を分析し、調整をしていきたい。また国家試験合格に向けての個別支援対象が増加していることから、低学年からの学習指導も充実させ、国家試験の全員合格を実現していきたい。

## 2025 年度の臨床工学科の取り組み

臨床工学科 学科長 五十嵐 朗

2025 年度の臨床工学科の取り組みについて、この 1 年間を振り返り報告いたします。

まず教育については、臨床工学技士のタスクシフト／タスクシェアに対応するため、旧カリキュラム履修者である 4 年生および既卒生を対象とした告知研修に参加してもらい、制度変更の趣旨、求められる能力像、学修内容の変更点を共有しました。また、2024 年度に構築した臨床実習体制、早期臨床体験実習（Early exposure）の拡充、学習支援の取り組みを継承しつつ、2025 年度は「基礎力の底上げ」と「国家試験合格に直結する学習習慣の確立」を柱として推進しました。

学習支援を要する学生の把握については、アチーブメントテストの結果に加え、不合格科目数や GPA を指標として学年ごとに対象者を抽出し、主として基礎科目（例：数学・物理、医学系基礎等）の補講を計画的に実施しました。補講は単なる再説明ではなく、演習を中心に到達度を確認しながら段階的に習得レベルを引き上げることを目的とし、学科全体で学修の遅れを早期に把握し是正する体制を強化しました。

国家試験対策については、前年度の合格率低迷を受けて、従来の全体演習・個別指導の枠組みを見直し、学修効果の向上を狙い、理学療法学科で実施されているグループワーク型の学習方法を取り入れました。具体的には、少人数グループを基本とし、学生が主体となって課題に取り組み、グループ内で他者に説明する過程を通して理解を深める形式を重視しました。加えて、欠席が続く学生には個別面談を行い、体調不良等の事情がある場合には、必要な出席要件や学習環境を調整するなど、学修継続を支える支援体制を整えました。

学生募集については、2024 年度にオープンキャンパス参加者増および SNS による到達拡大が得られた一方で、参加者増が出願増に直結しない課題が残ったことを踏まえ、2025 年度は「実践的学びの魅力を一貫した導線で伝えること」を重視し、オープンキャンパスで学科体験・説明を実施しました。具体的には、模擬手術室および実習室を統合したクリニカル・スキル・ラボ（C-Lab）を中核として、手術室から集中治療室（ICU）、病棟・透析室へと続く患者治療の流れに沿って、臨床工学技士の役割を理解できる体験型プログラムを整備し、学内実習から外部実践実習へと接続する教育の強みを明確に提示しました。さらに、在校生の学びや成長を具体的に示す発信を組み合わせることで、受験生の理解を深め、進路選択の後押しとなる情報提供を強化しました。

高校訪問については、重点地域を定めて効率的に展開しつつ、説明内容を学科内で統一し、教育の特色（実践力、学修支援、国家試験対策）を一貫して伝える体制を整えました。

臨床工学専攻科については、対象者に応じた情報提供と説明機会の確保を進め、生体医工学関連の研究室がある大学や連携病院看護部等を主な対象として、1 年間で国家資格取得を目指せる点と、医療機器に強い人材の臨床的必要性を具体的に提示し、学生募集活動を展開しました。その結果、工学系学部からの入学予定者につながりました。

2025 年度は、定員充足に向けて、オープンキャンパスにおける C-Lab を中核とした体験型プログラムの整備、在校生の学びや成長を示す情報発信、高校訪問の重点化、ならびに臨床工学専攻科の周知強化等の諸施策を実施したものの、学生募集を取り巻く環境は厳しく、結果として厳しい状況が続きました。2026 年度は、本年度の検証結果を踏まえ、オープンキャンパス参加から出願に至る導線の強化を図るとともに、実践的臨床教育と学修支援・国家試験対策の強みをより分かりやすく伝える取り組みを一層進め、所属教員が一丸となって局面の打開に取り組んでまいります。

## 藍野大学医療保健学部健康科学科の 2025 年

健康科学科 中井良育

### 1. 藍野モデルと健康科学科

本学では、医学モデルと社会モデルの視点から共生社会を目指し、誰一人取り残されない社会を実現するための藍野モデル（図1）を提唱しています。現代社会は、糖尿病や心臓病、高血圧など多く人が何らかの疾患や、気分の落ち込みや不安感など心身の問題を抱えています。そのような人々の中には、健康の不安を解消するために適切な医療を受ける必要がある人もいれば、未病の状態ではあるが、悪くならないための軽い運動などが必要な人もいます。また、大人だけではなく、子ども達においても、スマホやゲームへの依存、遊び場所の不足や運動不足といったことが要因で心身の発達に少なからず影響する可能性のある環境の問題も指摘されています。このように現代社会には、子どもから大人まで健康増進を必要とする人がたくさん存在しています。藍野モデルは、地域医療を支える人材育成を行うとともに、人々の地域生活と健康増進の支援を目的として、「身体づくり」、「心づくり」、「関係づくり」を通じて、子どもから大人まで、誰一人取り残さない地域全体の Well-being に貢献していくこと大学であることを示しています。

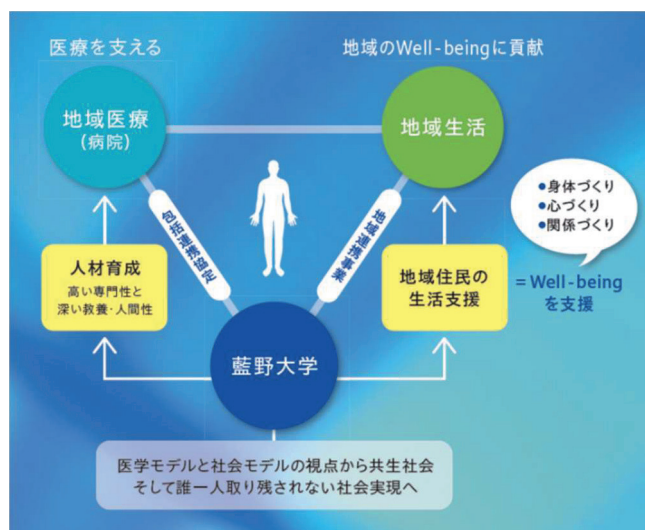


図1 藍野モデル

人々が心身ともに健康になるには、現在の状態から少しでもプラスの状態をめざすこととなります。そのためには、個人または集団を対象に、ニーズを掘り起こし、問題を解決し、また周囲の環境を変えるなど、健康な状態に導く人が必要になります。そこで、本学は2025年4月に、医療系大学という特徴を生かし、「身体づくり」、「心づくり」、「関係づくり」を通じて人々の健康増進を図り、「地域全体の Well-being に貢献」できる人材を養成することを目的とした健康科学科を新たに開設しました。健康科学科は、医学知識、トレーニング科学、心理学、社会科学を学び、パーソナルトレーナーや社会教育士などを取得し、一般企業、病院、行政などで活躍をめざす学科です。

### 2. 健康科学科の学び

開設年度である今年度は、11名の新入生を迎えました。少人数制による実践教育ができるという強みを活かし、医学知識を基盤とした、「身体づくり」に必要なトレーニング科学、「心づくり」に必要な心理学、「関係づくり」に必要な社会科学のかかる基礎科目や専門基礎科目を中心に学びを深めてまいりました。また、2025年4月に完成した校内トレーニングセンター「フィットネス・ラボ」（以下「F-Lab.」という。）に配置された最新のトレーニング機器や計測装置をはじめ、ダンスやピラティスに使えるスタジオを活用した実践授業を開講し、多くの学生が実践的に運動指導方法を修得しています（図2）。さらに、学外実習・インターンを通じて社会の課題を発見し、問題解決について考え、より深く学ぶ機会も設けています。なお、一年次における各学問領域、学外実習・インターンの学びは以下のとおりです。

(1) 医学

健康増進を必要とする人を支援するうえで医学知識は不可欠です。一年次は解剖生理学 I・II、バイオメカニクス、救急救命学、運動生理学、整形外科学 I・II、公衆衛生学、医学概論、栄養薬理学といった対象者のライフステージに応じたサポートを可能にするための幅広い医学知識にかかる学びを深めました。

(2) トレーニング科学

レジスタンストレーニング、コンディショニングトレーニングを科学的根拠に基づいて実践するとともに、トレーニングの成果をデータ化して測定・分析できる能力を養います。一年次は主に体力測定論を学びました。



図2 F-Lab.を活用した運動指導

(3) 心理学

対象者のモチベーションを引き出すために、臨床心理学や社会心理学、スポーツ心理学といった心理学科目を学習します。一年次は医療心理学、臨床心理学など、運動指導に欠かせない対象者との信頼関係の構築にもつながる学びを深めました。

(4) 社会科学

身体と心の学びに基づく運動指導のスキルを社会で実装(展開)するために必要な学びです。一年次は社会共生論や社会福祉論といった対象者が属するコミュニティや置かれた環境といった社会的な背景を理解した上での関わりを考察する視点を養いました。

(5) 実習・インターン

多用な実習先での実習を通して、社会で活躍するための素養を身につける実践的な学びを深める科目です。一年次は、健康科学実習 I を履修し、健康に関することを中心とした社会の問題に興味を持ち、各現場で働く人々の専門性がどのようなものであるかを幅広く知るための実習に取り組みました。

3. 地域健康共創拠点「F-Lab.」の地域開放

地域社会に貢献すると同時に、藍野大学の認知度向上を帯同する学生の実践教育を目的に、フィットネス・ラボを活用した取り組みを行いました。具体的な取り組みは以下のとおりです。

(1) 中学校・高等学校部活動の支援

茨木市立の中学校陸上部、京都府内及び滋賀県内高等学校陸上部の部員を対象とした運動機能の測定と評価

(2) 地域住民の健康増進

社会貢献事業の一環として実施している「子育てサロン」や、茨木市在住者の健康寿命延長を目的とした「Aino de まちトレ」におけるトレーニングや運動体験の環境として活用

次年度以降も「身体づくり」「心づくり」「関係づくり」の中心とした学びを深めるための取り組みや、地域健康共創拠点としての F-Lab.の地域開放に取り組み、健康科学科のさらなる発展・向上に努めてまいります。

## 2025年度 看護学研究科の取り組みと今後への課題

看護学研究科長 齋藤 祥乃

2025年度の看護学研究科は、6名の入学者(うち1名は年度途中退学)を迎えてスタートし、在籍院生数は15名となった。また、2026年3月には本年度修了生9名を送り出す予定である。

本研究科は、高度な専門性を備えた医療職養成に対する関連病院および医療・福祉施設からの強い期待を背景に、変化の激しい社会的要請に応えつつ、研究的思考能力を有する高度専門職としての看護職育成を目的として2015年に設置された。本年度で設置11年目を迎え、教育・研究体制のさらなる充実を図っている。

そのような中、2025年度より教職課程(養護教諭)専修免許課程の認可を取得した。これにより、本学看護学学科卒業生に対する養護教諭養成の一層の充実を図るとともに、既に養護教諭免許を有する者に対しても、より高度な専門知識および実践的能力の向上に寄与する教育を推進していく。さらに新たな取り組みとして、近年、妊婦の高齢化、合併症妊娠の増加、不妊治療の普及などを背景に、妊娠・出産を取り巻く医療的リスクは年々高まっている。このような産科医療の高度化に伴い、専門的知識と高度な臨床判断能力を備えた助産師の養成が社会的に強く求められている。そこで、本研究科では、単なる資格取得にとどまらず、「医療の質の向上」「地域医療への貢献」「女性支援の充実」「看護職のキャリア多様化」といった現代社会の多様なニーズに応えることを目的として助産師課程の設置を計画し、認可申請を行った。その結果、2026年度より課程設置の認可を得ることができ、助産学領域第1期生として4名の入学を予定している。

看護学研究科は設置から10年が経過し、現在は発展的充実を目指す第2ステージの段階に入っている。近年、看護学大学院を取り巻く状況として、全国的に進学動機の低下、臨床現場における人材不足、学費負担の問題などが重なり、入学者確保は多くの研究科に共通する課題となっている。このような状況に対応するためには、広報活動の充実のみならず、「進学するメリットの可視化」「社会人が進学しやすい制度設計」「臨床現場を巻き込んだ人材育成体制の構築」といった多面的な戦略が重要である。本研究科ではこれまでに、夜間・土曜開講、ハイブリッド授業、集中講義化、3年間の長期履修制度の導入、ならびに自動車通学の許可など、社会人学生が学びやすい環境整備を進めてきた。一方で、多くの看護師においては「修士課程へ進学する意義が十分に理解されていない」という課題も指摘されている。今後は従来の研究志向型の学生募集に加え、キャリア形成支援を重視した「キャリア開発型大学院」への方向性を模索し、「キャリアを発展させたい」と考える看護職を支援する教育体制の強化が求められる。さらに、入学者確保に向けては臨床現場との連携強化が最重要課題である。特に実習病院との連携を基盤とし、「個人の自己研鑽としての進学」から「組織的な人材育成としての大学院進学」へと認識を転換するための働きかけを一層推進していく必要がある。また、内部進学促進も重要な取り組みである。今年度の修了生には、初めて学部からの内部進学者が1名含まれており、さらに次年度開設予定の助産師課程においても2名の内部進学者を予定している。今後は学部教育との接続を強化し、内部進学者の継続的な確保に向けた取り組みを推進していく。

大学院教育のさらなる発展に向けて、本研究科では修士論文成果の社会的発信、すなわち学会発表および専門誌への論文投稿を重要な教育目標として位置づけている。今年度は、日本災害看護学会第27回年次大会、日本看護科学学会第45回学術集会、日本透析医学会第70回学術集会・総会、ならびに **Japanese Society for Bacteriology The 98th Annual Meeting** において研究発表が行われた。今後は、修了生がこれらの研究成果を基盤として継続的に研究活動を発展させ、学術的知見の蓄積および看護実践への還元につなげていくことを期待している。

## 2025 年度の健康科学研究科の取り組み

健康科学研究科長 酒井 浩

2024 年 4 月、念願であった健康科学研究科が開設となった。「認知健康科学領域」と「身体健康科学領域」の 2 領域から構成され、10 名の特別研究指導教員が 1 学年 6 名の定員に対して修士課程の指導を行う体制を構築し、2 年間で終了した。本研究科は、国の重点施策である健康増進を総合的かつ多角的に捉える知識・技能・態度を身につけ、健康づくり・生涯スポーツの実践と継続を推進していける人材を養成することが健康科学研究科設置の主な目的となり、そのために必要な基本的、応用的知識を身につけ、地域の場において実践していける基盤を学ぶことができるよう設計されている。

その初年度となる 2024 年度の入学者数は 6 名（認知健康科学領域 3 名、身体健康科学領域 3 名）であり、2 つの専門領域でバランスの良い配置となった。翌年の 2025 年度入学者は認知健康科学領域が 6 名、身体健康科学領域が 3 名の 9 名であり、2 年間の定員 12 名に対して 15 名が在籍するという大所帯となった。

2026 年度には、身体健康科学領域において特別研究指導教員を 2 名増員、認知健康科学領域については特別研究指導教員を 3 名増員することとなり、これまでよりも幅広い研究指導領域に対応できることが期待される。

### 【2026 年度 指導および指導補助教員】

(認知健康科学領域)

酒井 浩 (領域代表), 安藤 卓, 五十嵐 朗, 宮本年也, 岩村真樹, 宮本陳敏, 高畑脩平, 林部美紀, 林 拓世

(身体健康科学領域)

栗原秀樹 (領域代表), 後藤昌弘, 寺田 茂, 山科吉弘, 森田恵美子, 田中貴広, 大和洋輔, 青山宏樹

また、2026 年度入試においては、医療系国家資格有資格者でなくとも入学することが可能となり、医療保健学部健康科学科を卒業する学生のみならず、多様な方々を受け入れることになる。

このことで、さらに幅広い人材育成を行うことができ、健康増進・健康寿命延伸に向けた多様な人材の輩出、多様な研究成果の蓄積をもって社会における役割を果たしていくことが望まれる。

### 【2025 年度 活動実績】

(広報活動) 近畿作業療法学会において大学院ブース出展

奈良県作業療法学会にて大学院セミナー開講

オンラインでの大学院分野説明会開催

(教務実績) 2025 年 9 月 18 日 中間報告会開催 14 名が中間報告を行った

2026 年 2 月 17 日 修士論文発表会開催 4 名が修士論文発表を行った

藍野大学 中央研究施設

藍野大学中央研究施設 施設長 栗原秀剛

人的構成

構成員	氏名
施設長	栗原秀剛 (副学長、健康科学科、特任教授)
学内研究員	山田義博 (理学療法学科 教授) 田浦晶子 (臨床工学科 教授) 稲盛修二 (臨床工学科 教授) 山崎康祥 (臨床工学科 准教授) 林拓世 (臨床工学科 講師) 山本祐輔 (臨床工学科 助教) 宮本陳敏 (作業療法学科 准教授) 塚越千尋 (作業療法学科 准教授) ⇒2025年3月末まで 林部美紀 (作業療法学科 准教授) 横山雛子 (看護学科 助手) 三木志帆 (実験補助技術員) 藍野大学の学生：臨床工学科 10名
客員研究員	井出千束 (中央研究施設客員研究員) 山田久夫 (中央研究施設客員研究員) 中野法彦 (びわこリハビリテーション専門職大学 教授) 兼清健志 (びわこリハビリテーション専門職大学 教授) 玉地雅浩 (中央研究施設客員研究員)

研究活動

中央研究施設は、藍野大学を中心にびわこリハビリテーション専門職大学を含む学校法人藍野大学全体の研究活動を推進・発展させる拠点として活動している。藍野大学中央研究施設は医学部を除いた医療系大学では珍しく電子顕微鏡など大型の機器が充実しているのが特徴である。開設から経年劣化が進む設備について継続的な使用を可能とするためのインフラ整備を行っている。本年度は開設当時から使用している電子顕微鏡が駆動用コンピュータの故障のため使用不能となり、コンピュータ部分の修理により、使用可能となった。電子顕微鏡は極めて高価な機器であり、今後も大切に使用していく。大学全体の研究活動の拠点として中央研を明確に位置づけるため、学内教員、客員研究員との共同研究はもとより、学部学生の卒業研究指導等を積極的に行った。

(1) 共同研究施設としての体制の整備と機能の推進

中央研究施設は、大学で唯一の実験研究施設として本学並びに関連施設の教員・医師および学部学生に実験の場と研究機器を提供し、優れた研究成果を生み出すことを目的として活動している。また、共同研究を推進しており、学会や国際雑誌も含めた論文発表、科研費も含めた競争的資金の獲得、産学連携も含めた外部資金の導入、特許取得などの成果をあげている。

(2)研究施設独自の研究の推進

研究に関する今後の展望としては、臨床に直結したトランスレーショナルリサーチを推進し、国内のみならずグローバルに通用する最先端の研究を実践している。

主な研究内容

- (1)オルガノイドを用いた内耳再生に関する研究
- (2)Lmo2 転写因子複合体による血管新生制御
- (3)腎臓に発現する新規分子の解析
- (4)脊髄損傷モデルラット、マウスを用いた神経再生治療法の確立

「2024 年度 中央研究施設シンポジウム」開催

日時:2025 年 3 月 3 日

場所:MLC F201 アクティブコモンズ

2022 年度より設けられた「優秀研究賞」「研究奨励費」の採択者、および科研費新規獲得者を中心に 8 名が講演を行った。学長、学部長も出席され、ご挨拶をいただいた。長時間に渡り行われたが、総勢 22 名の来場者があり、質疑応答が行われた。

榎井 縁	科研費	往還するネパール人:家族の生存戦略と教育課題
山科 吉弘	優秀研究賞	水中歩行が高齢者の呼吸筋力に与える影響とその持続効果
高畑 脩平	優秀研究賞	教育現場における書字困難児の困難度に影響を与える包括的評価指標の探索
岩佐 美香	優秀研究賞	「Examining the Effectiveness of Using Disaster Scenarios in Health Care Education —看護学生の災害時の避難所での健康管理—」
杉山 芳生	科研費	初年次教育科目「学びの基盤」における教育実践研究
郡 慎平	優秀研究賞	送・脱血流量が静脈リザーバ内薬液濃度変化に与える影響
兼清 健志	科研費	新規足場材料 LASC01 による脊髄神経再生効果
中田 裕二	研究奨励費	薬剤耐性菌の分子疫学的手法による年次推移解析

研究成果 (抜粋)

論文

- Koike T, Oe S, Hirahara Y, Hayashi S, Seki-Omura R, Nakano Y, Sato Y, Iwashita H, Maeda M, Kataoka Y, Tanaka S, Mori T, Yamada H, Kitada M. Morphological Characterization of Glial Cells Surrounding Cajal's Initial Glomerulus of the Dorsal Root Ganglion Neurons Revealed Myelinating Schwann Cell Production. *Glia* 73(9):1883-1898, 2025
- Kurebayashi S, Aoki R, Yamada H. An Investigation of the Angular Velocity of Finger Joints during origami. *Proceedings of International Conference on Technology Education (ICTE)* p87-p96, 2025
- Tanabe A, Harachi K, Yamamoto Y, Muramatsu A, Nagahara H, Takemura N, Shimojo S, Furihata D, Mizuno -Matsumoto Y. Brain Function Assessment of EEG in Mild Cognitive Impairment using Timelag Analysis. *IEEJ Transactions on Electronics, Information and Systems* 145(4) 467-473 2025
- Ohgita H, Taura A, Nishimura K, Development of the New Rotarod Treadmill Test of Guinea Pigs. *AINO JURNAL: Vol.22:49-52* 2025
- 本田浩也, 兼清健志, 寺井淳, 丸山泰弘「専門職大学・理学療法学科学生における国家試験の得点と科目成績および学修行動の関連性の検証」*びわこ健康科学科 4 巻 p.9-16* 2025 年
- 田邊晃史, 原地絢斗, 山本祐輔, 村松歩, 長原一, 武村紀子, 下條真司, 降籬大介, 水野(松本)由子. 軽度認知障害における脳波の timelag 解析による脳機能評価 *電気学会論文誌 C* 145(4) 467-473 2025 年 4 月
- 坂口雄哉, 村松歩, 山本祐輔, 奥谷研, 平上尚吾, 水野(松本)由子. ヘッドマウントディスプレイを使用した運動イメージ時の脳波の機能的結合性の評価 *作業療法* 44(5) 504-512 2025 年 10 月
- 坂口雄哉, 村松歩, 山本祐輔, 奥谷研, 平上尚吾, 水野(松本)由子. 心電図および光電式指尖容積脈波を用いた Virtual Reality 環境下における運動模倣が自律神経活動に与える影響の評価 *日本バーチャルリアリティ学会論文誌* 2 163-172 2025 年 6 月
- 宮本陳敏, 尾藤祥子, 徐磊, 楊文貴, 酒井浩. 中国成都市におけるリハビリテーション学術交流 *藍野大学紀要*, (37),59-6 2025

学会発表等

- An Investigation of the Angular Velocity of Finger Joints during origami  
Kurebayashi S. Aoki R, Yamada H. *Proceedings of International Conference on Technology Education (ICTE)* 深圳(Shenzhen City Polytechnic, China) 2025.12.10-2
- Taura A. [The Challenge of Inner Ear Regeneration] “Possible application of regenerative medicine to vestibular disorders” 52nd Congress of the international Neurootological & Equilibrimetric Society KAWAGOE, JAPAN 2025.8. 27-29
- Matsumoto A, Kishino K, Tamachi M. and Wesugi S. Design of a Rigidity-adjustable Tensegrity Structure to Develop an Exoskeleton that Supports Knee Joint Stability and Mobility in Gait. (Best Student Paper Award) *ICDES 2025: The 6th International Conference on Design Engineering and Science*, 2025.8.
- Wakuda T, Iizuka S, Tamachi M and Wesugi S. Development of a Cover-Type Tensegrity Structure Considering Connectivity Through Tension With the Upper Limb *ICDES 2025: The 6th International Conference on Design Engineering and Science*, 2025.8.

- ・田浦晶子、扇田秀章、大森孝一、伊藤壽一 Lyl1 過剰発現マウス蝸牛の血管構造と低酸素応答についての検討 2 第 126 回 日本耳鼻咽喉科・頭頸部外科学会総会、横浜、2025.5.28.
- ・田浦晶子(座長) 第 2 群 臨床研修医・学生セッション 2 第 87 回耳鼻咽喉科臨床学会、奈良、2025.6.26
- ・田浦晶子、吉川弥生、扇田秀章、大森孝一、伊藤壽一 前庭血管ペリサイトについての検討 第 84 回日本めまい平衡医学会、横浜、2025.11.28.
- ・扇田秀章、田浦晶子、伊藤壽一、モルモット前庭障害モデルに対する内耳オルガノイド移植 — 自作ロータロッド装置を用いた前庭機能評価 第 84 回日本めまい平衡医学会、横浜、2025.11.28.
- ・田浦晶子(座長) シンポジウム 1「医工学との接点」第 84 回日本めまい平衡医学会、横浜、2025.11.28.
- ・玉地雅浩 カンファレンスや会議におけるコミュニケーションのあり方を再考する — 各専門職それぞれが、他職種との専門性に関心を寄せながらのやり取りを目指して— 第 44 回日本医学哲学・倫理学会、神奈川大学、横浜 2025.9.13
- ・玉地雅浩(座長) 2-10 神経筋疾患歩行(ポスター)第 23 回日本神経理学療法学会学術大会、石川県立音楽堂 / ANA クラウンプラザホテル金沢、2025.11.1
- ・坂口雄哉、村松歩、山本祐輔、田邊晃史、小林隆司、水野(松本)由子 作業療法介入による課題遂行時における心理状態および脳波変化の評価 第 47 回 Fmθ 研究会、2025.3.22
- ・坂口雄哉、村松歩、山本祐輔、田邊晃史、平上尚吾、奥谷研、水野(松本)由子 脳波の機械学習を用いた映像デバイスの違いによる運動イメージ内容の判別の比較 第 55 回日本臨床神経生理学学会学術大会、2025.11

著書

- ・田浦晶子、平衡機能検査:耳鼻咽喉科・頭頸部外科レジデントマニュアル 第 2 版  
監修:伊藤 壽一 / 大森 孝一 編集:楯谷 一郎/東京/医学書院/2025 年/73-82 頁
- ・田浦晶子、固視抑制検査:「イラスト」めまいの検査  
日本めまい平衡医学会: 東京/診断と治療社/2025 年/54-55 頁

中央研究施設管理運営委員会

構成(令和 7 年度)

栗原秀剛、中田裕二、山田義博、宮崎浩、田浦晶子、宮本陳敏

令和 7 年度 委員会開催日

	開催日	審議事項
第 1 回中央研究施設管理運営委員会	2025 年 5 月 13 日～5 月 16 日	・藍野大学中央研究施設細則の別紙1(第3条関係)「藍野大学中央研究施設 利用登録申請書」の書式変更について
第 2 回中央研究施設管理運営委員会	2025 年 11 月 25 日～12 月 5 日	・2026 年度(令和 8 年)中央研究施設の予算案について

動物実験部会

構成(令和7年度)

栗原秀剛、中田裕二、山田義博、田浦晶子、林部美紀、兼清健志

令和7年度部会開催日

	開催日	審議事項
第1回動物実験部会	2025年 5月13日	2024年度動物実験結果報告書および自己点検票について(13件) 【報告事項】
第2回動物実験部会	2025年11月26日～12月1日	新たに提出された「動物実験計画書」について(1件)

2025年度 承認された研究課題 (全12件)

承認日	研究課題名	実験責任者	備考
2025年 3月25日	脊髄損傷モデルラット、マウスを用いた神経再生治療法の開発	兼清健志	更新
2025年 3月25日	腎臓に発現する新規分子の解析	栗原秀剛	更新
2025年 3月25日	生化学的解析による脊損度別機能的電気刺激の神経再生促進のリハビリプロトコル策定	宮本陳敏	更新
2025年 3月25日	終糸上衣細胞の培養方法の確立と移植効果の検討	井出 千束	更新
2025年 3月25日	内耳再生に関する研究	田浦晶子	更新
2025年 3月25日	骨髄間質細胞をはじめとする体性幹細胞由来の神経突起伸長因子の解析	中野法彦	更新
2025年 3月25日	Lmo2転写因子複合体による血管新生制御	山田義博	更新
2025年 3月25日	ラット体外循環での長期生存モデルの確立と体外循環での炎症反応抑制に向けた検証	山崎康祥	更新
2025年 3月25日	体外循環・補助循環における生理的拍動流発生装置の開発および拍動効果の検証	稲盛修二	更新

2025年 3月25日	スタチンによる耳石硬化療法についての検討	田浦晶子	更新
2025年 3月25日	多チャンネル生体信号測定によるマルチモーダル感覚情報処理機構の評価	林拓世	新規
2025年 3月25日	Lmo2 転写因子複合体による頭頸部の血管新生制御に関する研究	田浦晶子	更新

動物使用数 (2024年度実験報告書による)

年度	ラット	マウス	合計
2024年	57匹	125匹	182匹

動物実験講習会の開催

第36回 動物実験講習会

開講日:2025年2月17日

参加者:18名(教員15名)

第37回 動物実験講習会

開催日:2025年12月8日

参加者:6名(学生6名)

実験動物慰霊祭の举行

昨年に引き続いて実験動物慰霊祭を举行した。

举行日:2025年11月5日

出席者:佐々木恵雲学長、栗原秀剛施設長、山田義博教授、稲盛修二教授、林拓世講師、山本祐輔講師、山田久夫客員研究員、林部美紀准教授、横山雛子助手、三木志帆実験補助員、臨床工学科4回生8名

- 一、 開式の辞
- 一、 学長挨拶 藍野大学 学長 佐々木恵雲
- 一、 学長による読経
- 一、 黙祷
- 一、 慰霊のことば 藍野大学中央研究施設長 栗原秀剛
- 一、 献花
- 一、 閉会の辞



## 2025年度のキャリア開発・研究センターの取り組み

キャリア開発・研究センター長 中野玲子

当センターは、多様な学生の就職支援を行うとともに、卒業後の生涯を通じた持続的な就業力向上を目指し、社会的・職業的自立に向けた指導などを通して、その充実及び高度化に資することを目的に創設された藍野大学内に位置する組織である。

以下に、今年度の医療従事者のキャリアアップ支援および広報活動の取り組みと今後の展望についてまとめた。

### 1. 医療従事者のキャリアアップ支援

研修名(時間)	日程	参加状況	講師・研修内容など
2024年度ファーストレベルフォローアップ研修	6/28(土)	修了者 55名 参加者 37名	新潟薬科大学看護学部教授 平山恵美子先生「看護倫理事例」
スキルアップ研修	6/21(土)	① 午前 88名 ② 午後 100名	① 京都大学大学院医学研究科教授 任和子先生 「どう書く?小論文レポート」 ② 美杉会グループ顧問兼看護部看護教育部長 高須久美子先生 「フレームワークをどう使う?」
セカンドレベル研修(180h)	7/3～9/20(木金土)	募集定員 35名 応募者 36名 受講者 36名	「ヘルスケアシステム論Ⅱ」15h、「組織管理論Ⅱ」30h、「人材管理Ⅱ」45h、「資源管理Ⅱ」15h、「質管理Ⅱ」30h、「統合演習Ⅱ」45h
退院支援研修	9/27(土)	参加者 43名	在宅ケア移行支援研究所宇都宮宏子オフィス代表 宇都宮宏子先生 退院支援研修「この町で暮らす'そして'生ききる'を実現するために」
認定理学療法士臨床認定カリキュラム	10/4: オンライン 5コマ 10/5～ 11/28 オンデマンド 10コマ 11/30:対面 講義5コマ	募集定員 40名 受講者 21名	必須科目 15コマ・選択科目 5コマ 対面講義 ① 「姿勢・歩行の評価・分析と理学療法」藍野大学 田中貴広先生 ② 「肩関節疾患の機能解剖と理学療法」藍野大学 熊田仁先生 ③ 「膝関節疾患の機能解剖と理学療法」三重大学医学部附属病院 久保峰鳴先生 ④ 「股関節疾患の機能解剖と理学療法」京都大学 建内宏重先生 ⑤ 「脊柱疾患の機能解剖と理学療法」堺若葉会病院 増井健二先生

2024年度セカンドレベルフォローアップ研修	10/11(土)	修了者 29名 参加者 17名	キャリアセンター専任教員 小砂見先生 「看護管理実践報告会」
卒業生対象セミナー	10/18(土)	あいの祭にて 参加者 13名	看護学部看護学科 西上あゆみ先生 「災害に向けた医療職の備え」
ファーストレベル研修 (105h)	10/31～ 12/21 (木金土)	募集定員 50名 応募者 68名 受講者 54名	「ヘルスケアシステム論 I」15h、「組織管理論 I」15h、「人材管理 I」30h、「資源管理 I」15h、「質管理 I」15h、「統合演習 I」15h

<スキルアップ研修>



<認定理学療法士臨床認定カリキュラム対面講義>



## 2. キャリアセンターの広報活動

### 1) セカンドレベル研修受講生募集

セカンドレベル研修定員 35 名確保のため、一昨年近畿圏内 13 施設(大阪府 8 施設、京都府 1 施設、兵庫県 1 施設)訪問し、36 名の応募があった。次年度の受講生確保のため、同様に施設訪問を計画している。また、ファーストレベル研修修了者 345 名及び、近畿圏内の病院・訪問看護施設 1,208 施設へリーフレットを送付した。

### 2) 認定理学療法士臨床認定カリキュラム受講生募集

近畿圏の病院 1,022 施設及び理学療法学科卒業生 537 名に広報資料を送付した。

### 3) 大学院への進学者確保のためのファーストおよびセカンドレベル研修受講生への説明

### 4) 藍野大学校友会との連携強化によるスキルアップ研修などの広報

## 3. キャリアセンターの今後の展望

当センターでは、質の高い組織的看護サービスの提供を目指す看護管理者育成の支援事業として、2014 年度から認定看護管理者教育課程のファーストレベル研修を実施、また 2017 年度からセカンドレベル研修も実施しており、大阪府の他、広く近畿圏内の施設の看護職が受講している。研修環境の整備、教育訓練給付制度の活用および広報活動などの取り組みを継続し、今年度セカンドレベル研修受講生が 36 名となり、開設以降初めて募集定員 35 名を充足した。しかし、現在の認定看護管理者教育制度は 2029 年度から新研修制度に変更予定であり、今後の事業計画の見直しが必要な状況である。新研修制度への移行期の対応については、大阪府看護協会と連携し情報収集を行いながら検討を進めていく。現行の研修実施に関しては、従来の広報活動を継続し、受講定員確保に努めていく。

2024 年度、認定理学療法士臨床認定カリキュラム(運動器)を開講し、理学療法士の専門的かつ高度な実践力習得の支援に取り組んだ。初年度は、募集定員 40 名であったが、受講者は 11 名と少なかった。2 年目の今年度は、日程や研修方法をオンライン型講義(5 コマ 1 日)、オンデマンド型講義(10 コマ 55 日間配信)および対面講義(5 コマ 1 日)に変更し、受講者が 21 名に増加した。次年度の定員充足に向け、広報や研修方法など検討を進めていく。

また、人口減少や高齢化率のさらなる上昇により医療介護分野での多様な課題を抱えている現状において、高齢者看護領域の専門性の強化が求められおり、当センターの新規事業として 2027 年 4 月に認知症看護認定看護師教育課程開設を計画し教育機関としての申請準備を始めている。

今後も、本法人のネットワークを生かし、地域医療の質向上に貢献できる人材の育成に取り組み、新たな事業展開を通して地域社会に貢献したいと考えている。

## 2026年度に向けた新体制整備に関する取り組み報告

大阪茨木キャンパス事務局  
事務局長 小林 正明

### 1. 改正私立学校法施行に伴う新体制の発足

2025年度より改正私立学校法が施行され、本法人は6月末から理事5名・評議員6名・監事2名に加え、新たに会計監査人を置く体制へ移行した。

今回の改正は、「幅広い関係者の意見反映」「逸脱した業務執行の防止」を目的とし、役員等の資格・選任・解任手続、理事会・評議員会の職務・運営、特別背任等の罰則強化など、学校法人の管理運営制度を大きく見直すものである。

新体制の特徴として、大学・短期大学・高等学校の学長・校長が役員等に選任されていない点が旧体制からの大きな変更点である。そのため、役員等と学長・校長との意見交換・情報共有の重要性が一層高まっているが、現状では合同運営委員会での報告等に留まり、より踏み込んだ体制整備には至っていない。今後は常任理事会等の活用を通じ、安定した法人運営に向けた意見交換の充実を図る。

また、同法改正に伴い内部統制システムの整備が求められ、理事会にて基本方針を決定したうえで内部統制委員会を設置した。委員会では、4つの目的と6つの基本的要素に基づき、システムと運営の齟齬の有無を確認し、改善を進めていく。

### 2. 2024年度決算と財務状況の分析

2024年度決算において、日本私立学校振興・共済事業団の定量的経営判断指標による区分は「A3」を維持した。しかし、経常収支差額は2021年度以降黒字を維持してきたものの、2024年度は▲128百万円の赤字となった。負債率も25.6%と、注意が必要とされる25%を上回った。主な要因（単年度特別支出を含め）は以下の通りである。

○藍野大学20周年事業

○大阪阿倍野キャンパス整備（2期工事）に伴う短期大学部移転統合費用

○借入金返済および大規模投資に伴う減価償却費の増加

○在籍者数は全体として増加したが、学納金の高い大学・短期大学部で減少し、中等教育機関で増加した結果、学生納付金収入が減少

これらを踏まえ、2025年度予算では2期連続赤字を回避するため、第一次・第二次補正予算で各1億円、計2億円の削減を実施した。その結果、今年度決算見込みは数千万円の黒字となる見通しである。

ただし、2025年度中間決算においても、大学・短期大学部の在籍者減少と中等教育機関の増加という構造は継続しており、入学定員充足率の低下や退学者増加が顕著である。これは全国的な傾向が本法人にも強く現れてきている状況といえる。

### 3. 2026年度在籍者数見込みと課題

2026年度の収容定員充足率予測は、最大100.2%、最小94.9%である。特に最小値は、今年度10月1日時点の充足率94.9%（退学者51名）と同水準であり、厳しい状況が続く見込みである。これまで退学者・休学者対策には精力的に取り組んできたが、さらなる強化が必要となる。

#### 4. 内部監査で指摘された課題と今後の方向性

令和7年度中間内部監査では、法人全体における定員未充足の要因として「受験者数減少」だけでなく、「退学者の増加」への分析と対策が必要であるとの指摘があった。

また、法人経営改善策として、学部・学科・学校単位での「やめる・まとめる・わかる」といった外科的措置の検討段階に入っているとの意見が示され、法人として危機意識を持つ必要性が強調された。これを受け、収容定員未充足の学部・学科については、改善策と今後の在り方を検討していく。

#### 5. 明浄学院高等学校との高大接続強化と募集戦略

学生募集対策として、明浄学院高等学校との教育課程の連続による一貫教育を軸とした高大接続の強化が重要となる。大阪府下の私立高等学校は、授業料無償化制度の影響により人気上昇し、公立：私立の比率は従来の7：3から6：4へと変化している。

明浄学院高等学校はこの恩恵を受け、昨年度まで普通科単独では定員200名を確保できなかったが、今年度は衛生看護科とともに両学科で定員超過の見通しである。

大阪府下、全ての私学が恩恵を受けることが出来ている訳ではなく、令和7年度入学者は府内94校のうち定員超過は49校に留まり、半数は定員割れである。また、令和8年度入学試験実績において、明浄学院高等学校は専願353名（定員320名）と、92校中35校のみが達成している「専願での定員超過」を実現しており、安定した募集ができています。今後も「勝ち組」としての地位を維持するためには、

- 退学者の減少（今年度1月時点で20名）
- 基礎学力向上のためのカリキュラム・教授法強化
- 4年制大学進学へのシフト
- 高校生活の充実による満足度向上

が不可欠である。

一方で、藍野大学との偏差値帯の乖離が高大接続の課題であり、まずは明浄学院高等学校の偏差値向上が必要となる。現在は短期大学部3年課程との単位接続による一貫教育を先行して検討している。

また、大学・短期大学部の定員が厳しい学科については、高等学校段階からの協力体制を強化し、中学生・保護者・中学校教員へのアプローチを進めることで、大学等のブランド向上にも寄与する。

#### 6. 2026年度の組織再編と事務組織改革

2026年度より、各設置校の学長・校長が刷新され、新たな執行部による学校運営が始まる。また、法人事務所の所在地が大阪府茨木市から大阪市阿倍野区へ変更されることに伴い、現法人事務局を解体し法人本部として再編し、多くの事務職員が各設置校へ配属される。

前任の垣尾局長が進めた「業務の標準化」「業務の省力化」を基盤とした本部構想を実現させる。新たな体制で法人本部と設置校が横断的に連携する戦略プロジェクトを推進し、事務職員の高度化・多様化に対応できる専門知識を備えたゼネラリスト育成を目指すと共にセクト主義にとらわれない事務組織改革を進めていく。

## 本年の中央図書館の活動

藍野大学中央図書館長 山田義博

本年も中央図書館は限られた予算のなかではあるが、活発なそして地道な活動を続けてきた。年報に述べるのを許していただければ図書館員や関係者一同の多大な努力に感謝したい。本年の第一目標はこれまで通りに円滑に図書館業務が行えることでありそれはおおむね達成された。設備の更新については、とくに喫緊の課題であるものは、3年計画の初年になされたので、本年はメンテナンスに心掛けた。図書館の広報活動は現在も活発で、移動図書館ではなかなか足を止めてくれる学生は少ないものの、図書館の存在を周知するために大きな貢献をしている。地域への貢献も限られてはいるが、例年どおりに行われ、地元の中学生への職業体験学習や夏場の学習の場ともなっている。データベースの活用についても図書館の教育活動は充実している。全国の大学図書館が、本当に多額の資金を学術雑誌社等のデータベース利用に支払わねばならない時代で、本学のような比較的規模の小さい大学の対応は限られてしまうが、教員の研究活動のサポートは積極的に行われている。Aino Journal や紀要の編集に加えて年報の編集も図書館で行っている。編集作業はそれなりに大変なものだが、充実した編集が維持されている。短大移転にともない活気が失われるのが心配されたが、1階のスペースの昼食時の解放、大学関係の授業が戻ってきたこともあってかつての図書館の素晴らしい雰囲気が戻ってきた。照明等の改善がなされたらさらに明るい雰囲気が醸し出されると思われ、この点は今後に期待したい。図書館にどこまで娯楽性を取り入れるかは永遠の課題で、現館長も娯楽施設としての図書館には限定的にしか賛成できない。しかし、学生、教員にとって図書館がもっと身近な存在であるという必要性は痛感しており、さらに努力を続けていきたい。図書館の講義室は、近年短大の授業で主に利用してきたが、この冬は大学の国家試験対策や再生医療入門の授業としても使用した。久しぶりにきわめて一生懸命に、ひとことも聞き漏らさないように講義を聴く本学学生の姿に接し、日ごろは一人で研究室に閉じこもりがちな私もつかの間の幸せを味わえた。やはり図書合同教室が一番好きである。

(令和8年1月20日)

## 新施設「フィットネス・ラボ」完成記念イベント

日時：2025（令和7）年5月25日（日）14:00～

（於 藍野大学 藍野ホール・フィットネスラボ）

2025年度、藍野大学に新学科「健康科学科」が新設され、新施設「フィットネス・ラボ」の完成記念イベントとしてゲストになかやまきんに君を招いて、オープニングセレモニーおよびトークショーを行った。中高生や保護者等約300人が集まりイベントは大いに盛り上がった。

### 【当日の様様】

